

TTによる小学校外国語活動での学級担任の発話が 児童の発話理解に及ぼす影響についての研究

原 めぐみ

A Study on the Effect of Teacher Talk by a Homeroom Teacher on Pupils' Speech Comprehension in Team-Teaching Foreign Language Classes

Megumi HARA

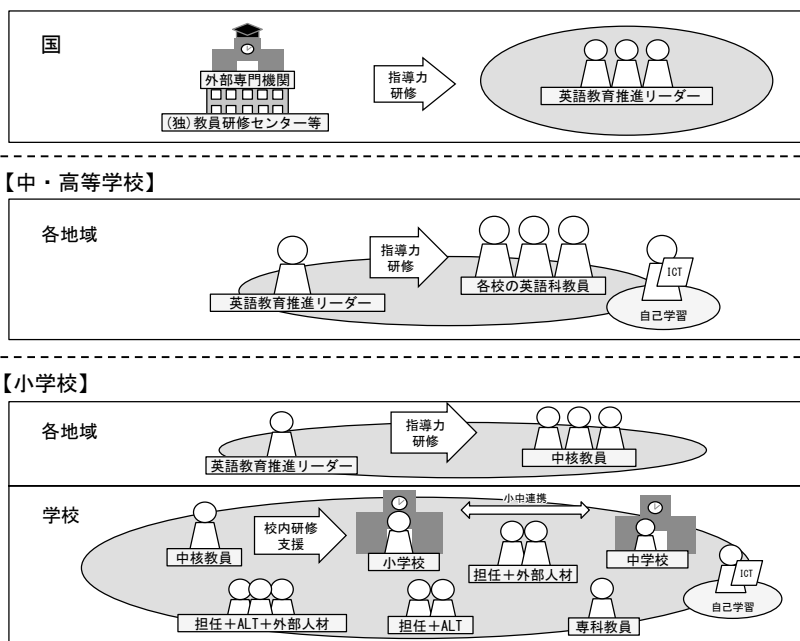
1. は じ め に

2017（平成 29）年 3 月に新しい小学校学習指導要領が告示された。2 年間の移行期間後、2020（平成 32）年に全面実施される今回の新指導要領では、3,4 年生から外国語活動が年間 35 時間、5,6 年生からは教科外国語が年間 70 時間導入される。外国語活動の開始学年が中学年に前倒しされ、高学年では教科化されることに伴い、今まで小学校では系統的に指導されていなかった「読むこと」、「書くこと」の指導が導入される。

2. 問 題 と 目 的

教科外国語の導入に伴い、新学習指導要領に対応した外国語活動及び外国語科の授業実践事例に関わる映像資料の提供や副教材の公開が文部科学省のホームページ上で行われており、教材面での支援は進んでいる。しかし指導体制に関しては、新たに英語専科教員を全国に補充するのではなく、学級担任への研修の充実をもって指導体制を整えていくプランが示されている。「英語教育における今後の研修・教育について」（文部科学省 2017）によると、国が 5 年間に渡り、1 年につき約 200 名の英語推進リーダーを研修し、リーダーが中核教員に研修を行い、中核教員が校内で外国語活動および教科外国語を担当する教員に研修を行う計画が進んでいる。このような計画では、すべての教員が研修を受けるのに時間もかかり、今でさえ多忙な学級担任に益々負担が多くなっていくことが予測される（図 1）。

新たな英語教育の実現のための研修体制（イメージ）



これらの研修に加え、教員養成課程の改善充実により、英語指導力に優れた小学校教員を養成・輩出

図 1：新たな英語教育の実現のための研修体制
「英語教育における今後の研修・教育について」（文部科学省 2017）

本研究の目的は、小学校英語教育の中心的な役割を担う学級担任が授業内で実際にどのような発話を行っているかを調べ、担任の発話が見童の理解にどのような影響を及ぼしているかを明らかにすることである。そのために、同じ授業計画で同じ日本人英語教育指導助手（以下 JTE）とチーム・ティーチング（以下 TT）を行った二人の学級担任の発話を比較し見童の発話理解の差異について考察をした。その結果から、現在の外国語指導助手（以下 ALT）や JTE 中心の授業から学級担任の中心の授業に移行する際に、学級担任が行う発話に関する知見を得ることができると考えた。そのために、約半年間の参与観察を通し、JTE との TT における学級担任の発話の実態を明らかにする。小学校での外国語活動は 2011（平成 23）年からだが、実際の授業における担当教員の発話をプロトコル分析した研究は少なく、特に JTE と学級担任の TT における学級担任の発話に焦点を当てたものはほとんど見られない。

3. 研究の背景

3.1 指導者による発話（ティーチャートーク）

Ellis (2008) によるとティーチャートークは、外国人に話しかける時のフォーリナートークと同様に特定の状況での言語形態と見なされている。指導者は教室で学習者に話しかける際に様々な方法で言語を調整している。しかしどのようなティーチャートークが最適であるか、指導者は何を基準に言語調整を行っているかなど、まだ不明な点が多い。

そのティーチャートークを Cullen (1998) は、TTT (Teacher Talking Time) と STT (Student Talking Time) との比較において TTT を減らすなどという量的な問題だけではなく、どのようなティーチャートークが効率的に学習者を助け、コミュニケーションなやりとりを促進するのかという質的な面が重要視されていると述べている。そしてそのティーチャートークを4つのコミュニケーションなものとして4つのコミュニケーションではないものに分類している。

(1) コミュニティブなティーチャートーク

- ① Referential questions (参照質問)
- ② Content feedback (内容に関するフィードバック)
- ③ Speech modification (言語修正)
- ④ Negotiation of meaning (意味交渉)

(2) コミュニティブではないティーチャートーク

- ① Display questions (表示質問)
- ② Form-focused feedback (形式に関するフィードバック)
- ③ Echoing (繰り返し)
- ④ Predictable IRF (initiation-response-feedback) (予測可能な発問－応答－フィードバック)

3.2 外国語活動における指導者別発話の特徴

「平成 28 年度小学校外国語活動実施状況調査」(文部科学省 2016) によると、主として英語教育を担当する教員は学級担任が 93.1% と最も多く、専科教員は 3.4% となっている。また、学級担任を補助する ALT の外国語の授業における活用率は、61.7% となっており、増加傾向にある。ALT 以外の留学生や英語が堪能な地域人材の活用は 12.8% である。

このような様々な指導者の中で、白畑・石黒 (2007) は小学校英語活動での ALT の発話分析を行った。その結果、ALT の使用した英語の語彙レベルは中学生レベルの容易なものであり、担任の英語能力も中学三年間の語彙、つまり「英検 3 級程度」の能力で指導できることがわかった。

指導者の使用する語彙レベルではなく、指導者間や児童と指導者間の CS (コミュニケーション

ンストラテジー)の観点から指導者の発話を分析した泉(2017)の研究では、TTを含む私立・公立小学校における10の異なった外国語活動の授業実践事例を扱っている。その結果、困った時やわからないときの理解の進め方を扱う場面が少なく、定型表現的な反応や評価が多いことがわかった。一方、一部の私立小学校ではJTEとALTの間で効果的にCSが使われている場面もあった。例えば、JTEとALTのインタラクションの中で先生同士が実際に単語の意味を聞き返したり、確認を行う場面を繰り返し見せている。さらに先生同士の会話から児童を巻き込み、二者の対話から三者そして全体へ広がるような場面も見受けられた。

次にALTと学級担任によるTTにおいて、学級担任の影響に関する黒田(2012)の研究では、1人のALTが同じ授業計画で授業を行っても、3人の学級担任の関わり方により、児童の反応が異なっていたことがわかった。正しく答えることを重視したクラス、聞く姿勢を重視したクラス、子供同士で助け合おうとするクラスなどの違いがあった。

本研究では、JTEと学級担任によるTTによる授業を研究対象として、学級担任の発話の影響を明らかにする。参与観察を行ったH市では、5年の授業は、全小学校に派遣されているJTEと学級担任のTTによって外国語活動が行われていたが、小中一貫英語教育を推進するために、6年の2学期からは近隣の中学校英語教員と学級担任での授業が行われていた。H市の指導体制は、全国的に主流である学級担任のソロティーチングや学級担任とALTのTTによる指導ではなく、学級担任とJTEのTTや学級担任と中学校英語教員のTTという恵まれた環境であった。

4. 研究の方法

4.1 研究の枠組み

外国語活動における学級担任の発話について実態を明らかにするために、2016年8月から2017年3月に行われた外国語活動の授業の参与観察を行った。本研究の分析対象とした授業は3学期に行われた授業である。当該授業を研究の対象とした理由は、5年最後の単元であり、学級担任とJTEが約1年のTTを通してお互いのティーチングスタイルにも慣れ、学級担任だけでなくJTEも児童の個性を把握できていた。さらに単元の内容が食べ物の言い方や日本語と英語の発音の違いなど、児童が興味を持ちやすい導入部分でもあったからだ。

観察を行った授業を録画し、プロトコル分析を行った。聞き取れる発話をすべてプロトコル化し、映像から読み取れる児童の反応や動きなども記述した。原(2016)で使用した枠組みを一部修正し、20項目のカテゴリーに分類した。さらに20のカテゴリーを4つの枠組みに集約した(図2)。2クラスの学級担任の発話に焦点をあて、カテゴリー別に発話回数をカウントし分析を行った。

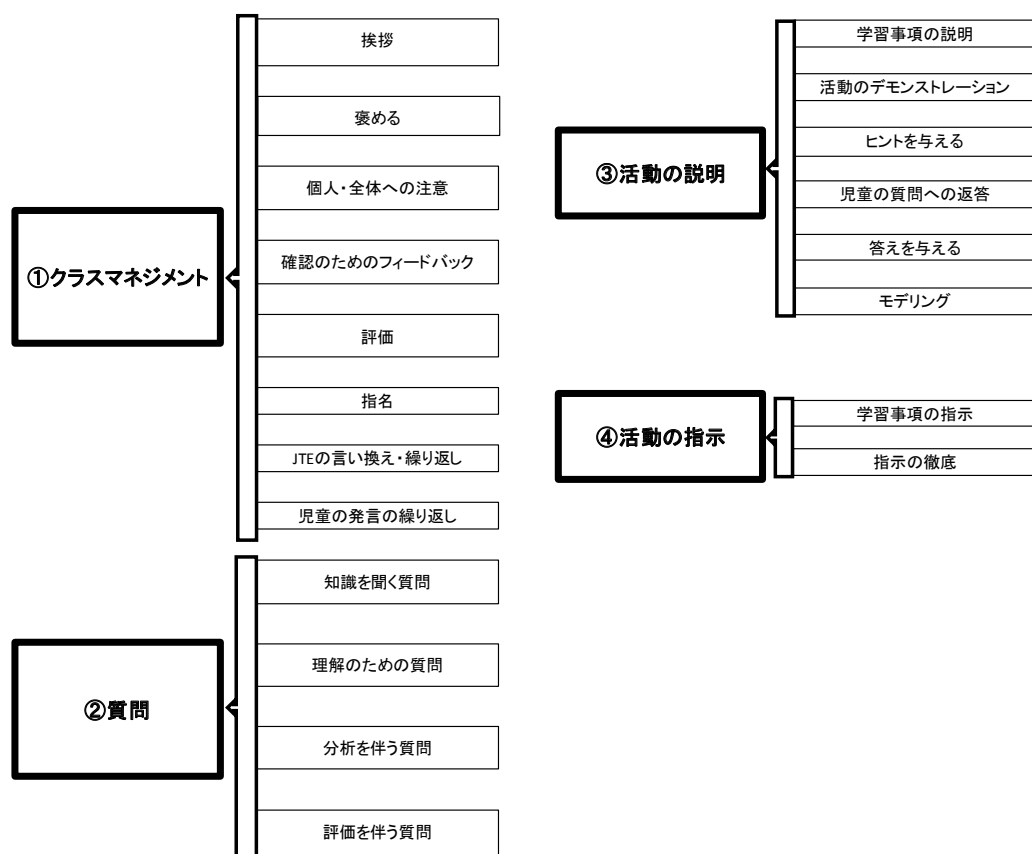


図 2：指導者の発話分析の 4 つの枠組み

4.2 調査対象

調査の対象とした授業は、大阪府 H 市内にある公立小学校 5 年 A 組と B 組の外国語活動である。授業者は、学級担任と JTE によって行われた。JTE は 8 年間の指導経験がある、経験豊富な指導者であった。A 組と B 組の学級担任はどちらも男性教員だった。外国語活動の授業は、JTE が中心に指導案やワークシートを作成し、毎回の授業が行われていた。指導者同士の打ち合わせは週に 1 回程度行われていた。

4.3 授業の概要

「Hi, friends 1!」Lesson 9「What would you like? ランチメニューを作ろう」の 1 単元 4 時間の内の 1 時間目の授業である。Lesson 9 の目標は、児童の身近な食べ物の名前を英語で言えるようになることと共に、レストランなどで丁寧な言い方で欲しいものを注文する表現を知ることである。各時間の内容は表 1 の通りである。また、授業計画を資料 1 に示す。

1 時間目	レストランで、欲しいものを尋ねたり、答えたりする丁寧な表現を知り、食べ物の名前を英語で言えるようにする。
2 時間目	色々な国の学校給食を知り、日本と外国の給食の違いや共通点に気づくことができる。
3 時間目	丁寧な言い方で欲しいものを尋ねたり、答えたりする表現を復習し慣れ親しむ。
4 時間目	オリジナルランチメニューを理由もまじえて発表する。

表 1：Lesson 9「What would you like? ランチメニューを作ろう」の各時間の内容

5. 結果 と 考 察

5.1 学級担任の発話数（日本語と英語）

45 分授業の中で A 組担任の発話数は 75（日本語 53、英語 22）、B 組担任の発話数は 34（日本語 20、英語 14）となっており、発話数においては倍以上の差がある。

英語の発話に関しては、B 組担任は JTE との活動のデモンストレーション（レストランでのロールプレイ）の際に限定されているが、A 組担任は、活動のデモンストレーションに加え、活動の指示、クラスマネジメント、JTE への聞き返し、学習事項の説明の際にも英語を使用していることがわかる。

日本語の発話に注目すると、A 組担任、B 組担任ともに発話の 80% がクラスマネジメントに分類されるものであった。このことから JTE との TT では、活動の説明や指示は JTE が行い、クラスマネジメントは学級担任が行うという役割分担が見受けられた。次に、学級担任の発話が見童の発話理解に影響したと思われる例を英語発話と日本語発話に分類し挙げる。

5.2 A 組担任の効果的な英語発話

① 英語での活動の指示 5:27 ～ 5:37

JTE：これらに共通することは？

JTE：日本だったらカタカナで表していると思います。

JTE：でも元になる英語とは発音の異なるものです。

JTE：その言い方にみなさん慣れたいと思います。

JTE：This is ハンバーガーじゃなくて hamburger。

HRT：OK. Next is chants.

JTE：So, everyone. Watch TV.

JTE がチャンツのタイトルを言った後に、HRT が活動の導入を英語で行った。その際に騒がしかった児童たちは HRT の英語の指示を聞き、静かになり前方のスクリーンに注目しチャンツの

導入がスムーズに行われた。

② 英語でクラスマネジメント 15:02 ～ 15:35

S11： まずお客さんが座ってて、メニュー見て何か勧められてたけど、注文をして、作ったものを一つずつ渡して

S11： それから料理の名前をゆっくりと言って

HRT：なるほど

HRT：Great！

HRT：すごいね

HRT：一人でそこまで聞き取れて、拍手。

児童が HRT と JET の英語でのやりとりを聞いてわかったことを答えた後に、“Great!” と自然に英語で褒めている。それを聞いた児童は発表を終えた後、うれしそうな表情で座った。

③ 活動のデモンストレーション中の JTE への聞き返し 27:04 ～ 27:32

JTE：OK. Everyone, Watch me.

JTE：A sensei will show you a demonstration.

JTE：A sensei.

JTE：Three dishes.

JTE：Please ask me.

HRT：Me?

JTE：Please ask me.

HRT：What would you like?

JTE：I'd like sandwich, salad, and pudding, please.

45 分の授業の中で、一番自然な英語の使用場面である。活動のデモンストレーションを行っている場面であるが、Me?（児童ではなく私が?）と英語で JTE に確認を行っている。

④ 英語で JTE の発話の繰り返し 29:06 ～ 29:09

JTE：OK. I will order five dishes.

HRT：Five.

JTE：One, two, three, four, five dishes.

⑤ 英語で JTE の発話の繰り返し 30:55 ～ 31:01

ALL : Curry and rice.

JTE : Curry and rice. And next?

JTE : Next?

HRT : What is next?

ALL : Salad,

④と⑤はどちらも JTE の発話を繰り返している。授業の他の場面では、JTE の発話を日本語で言い換え児童の理解を助ける発話があったが、ここでは英語で繰り返すことにより、児童に英語で確認させる機会を与えている。

⑥ JTE とのやりとり 11:47 ～ 11:49

JTE : Today we have a nice red wine.

HRT : Really?

JTE : Would you like to have some wine?

HRT : I want to have white wines.

JTE とレストランでの会話のロールプレイを行っている場面であり、台本にはない台詞で自然に Really? と学級担任が言ったところである。学級担任が英語を使用すると児童はいつも静かになり、聞く姿勢が整う。JTE と HRT のやりとりは 1 分半ほど続くが、児童は私語をせずにしっかりと聞いている。

5.3 A 組担任の効果的な日本語発話

① JTE の英語での発話を日本語で繰り返し 4:00 ～ 4:08

JTE : Anything else?

HRT : ない ?

JTE : Anything else?

HRT : 他ない ?

コミュニケーションなティーチャートークの一つである言語修正が行われている。JTE の質問を繰り返すのではなく、児童の理解を促すように日本語に変えている。

② JTE の繰り返し 15:36 ～ 15:42

JTE：先生はメニューを渡した時、何て言ってた？英語じゃなくても日本語だったらだいたいお店行ってメニューを渡された時。

JTE：お店屋さんは何て言ってる？なんていう日本語だったら…

HRT：何て言うの？

HRT は JTE の質問を繰り返しながら、児童の答えを引き出そうとしている。

③ 内容に関するフィードバック 19:32 ～ 15:42

S15：I'd like pizza.

JTE：Seafood pizza, mix pizza, and special pizza?

JTE：What would you like?

S15：Special pizza.

S15：ステーキ

JTE：Beefsteak？

S15：Beefsteak.

HRT：ピザとビーフステーキ食べるん？

ピザとステーキを注文した児童の発話に個別に応答している。児童は自分の注文内容が伝わったことがわかり、学級担任の質問に満面の笑みで頷いた。

④ 形式に関するフィードバック 21:13 ～ 21:16

S14：ハンバーグ

HRT：ちゃんと言え

JTE：Hamburg steak or special steak?

S14：Hamburg steak.

HRT：I'd like や

カタカナ発音の児童に対し、英語の発音で言うことを促し、次に単語だけで答えた際には“I'd like”を足すように注意した。学級担任が形式に関して発話した場面はとても少ないが、食べ物の言い方を英語で知ること、丁寧な言い方で欲しいものを注文することはこの単元での目標であり、そのためにこの場面では形式の修正を行ったと考えられる。

⑤ 児童の緊張をほぐし、発話を促す 18:36 ～ 19:00

JTE : This is a menu.

JTE : What would you like?

HRT : うれしそうな兄弟やな

HRT : 帰る気か？水だけもらって帰る気か？

JTE : What would you like?

S15 : 俺これとこれ

JTE : I'd like……

S14 : I'd like beefsteak.

レストランのロールプレイをやりたいと手を上げ前に出てきたが、JTE に注文を訪ねられ黙っている児童にユーモアを交えながら、言葉をかけリラックスさせようとしている。

5.3 ま と め

まず、学級担任の発話はどちらの担任も予想通り、英語での発話数が日本語と比べ少ないということがわかった。しかし A 組の担任は、JTE とのロールプレイ以外であっても、できる限り英語を使用しようとする姿勢を垣間見ることができた。今後、学級担任のソロティーチングあるいは学級担任中心の授業に移行する際には、英語での発話を増やす必要がある。学級担任の日本語発話の 80% がクラスマネジメントに分類されるという結果から、クラスマネジメントを英語で行うことによって、児童への英語でのインプットの量が増える。すでに JTE は、“Watch carefully.” “That's right.” などを授業中に使用しており、研修に参加することが難しい学級担任でも、JTE のクラスルームイングリッシュのリピートや言い換えを授業内で行うことによって学級担任の英語使用量も増えると考えられる。

黒田（2006）は「英語教師（この場合は ALT）と子どもの間をつなぎ、授業運営を円滑にするためには、学級担任の関わり方は重要である。実際十分に連携のとれた TT においては、担任の関与が子どもに大きな影響を与える。」と述べており、本研究でも、JTE は全員に向けた発話が多く、学級担任は個人の発言の内容に対する発話が多かった。例えば、答えが出ない児童には質問を言い換えたり、ヒントを与えたりし、各児童の特性にあった発話を行っていた。

さらに担任は発話で児童の理解を促しただけではなく、JTE がスムーズに活動を行えるような援助も行っていた。例えば、児童のロールプレイが 2 回目になったときには、クラス全体の聞く姿勢が乱れた。その時、学級担任は特に注意散漫な児童を教室の前に呼びシェフ役をやるように指示した。そうすると、レストランで注文していたお客役の児童は JTE と会話を再会し、他の児童も再び集中して聞けるようになっていた。

今回研究対象の2つの授業は、同じJTEを中心とした、同じ授業計画に沿った授業であったが、A組とB組では、児童の反応に違いが見られた。A組の児童の発話数（全員でリピートしている部分は除く）は78であり、B組の56より発話回数が多かった。そのため指導者と児童のやりとりが多いと言える。しかしB組では、学級担任の発話や児童とのやりとりがA組よりも少ない分、最後に教科書のリスニング活動に取り組むことができ、本時間の内容を振り返ることができた。

これからは、小学校外国語活動・教科外国語において学級担任の役割が大きくなる。学級担任及び児童の英語での発話を増やすこと、児童と指導者とのよりコミュニケーション的なやりとりを増やすことが期待される。

6. 課 題

本研究で調査の対象とした授業は、H市内の小学校で実践された2回の授業のみのデータであるために一般化はできない。今後はTTではなく、学級担任が中心になって行う外国語活動を研究したり、児童の個々の発話にも注目したりすることが、学級担任の発話が児童の英語による発話に及ぼす影響をより深く解釈する上で必要である。

参考文献

- 秋田喜代美・能智正博(2007).『はじめての質的研究法』東京図書.
- Cullen, R. (1998). Teacher talk and the classroom context. *ELT journal*, 52 (3), 179-187.
- 原めぐみ(2016).「参与観察に基づく小学校外国語活動におけるチーム・ティーチングの実態調査」関西外国語大学『研究論集』103: 109-117.
- 泉恵美子(2017).「小学校英語における児童の方略的育成を目指した指導」京都教育大学『京都教育大学教育実践研究紀要』17: 23-33
- 黒田真由美(2006).「静粛を要する際の英語教師の働きかけの変化：小学校5年生の授業観察に基づいて」京都大学大学院教育学研究科『京都大学大学院教育学研究科紀要』52: 307-320.
- 黒田真由美(2012).「小学校の外国語活動にみられる学級担任の影響 小学3年生の学級間比較」日本教育心理学会『第54回総会発表論文集』130.
- 文部科学省(2016).「平成28年度小学校外国語活動実施状況調査」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2017/04/07/1384236_04.pdf
- 文部科学省(2017a).「英語教育における今後の研修・教育について」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/112/shiryo/_icsFiles/afiedfile/2017/03/06/1382682_8_1.pdf
- 文部科学省(2017b).「小学校学習指導要領」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1383986.htm
- Nunan, D. (1989). *Understanding Language Classrooms*. Hemel Hempstead: Prentice Hall.
- 白畑知彦・石黒幸志(2007).「小学校英語活動でのALTの英語発話を分析する」静岡大学教育学部『静岡大学教育学部研究報告・教科教育学篇』43: 11-23.
- Thornbury S. (1996). Teachers research teacher talk. *ELT journal*, 50 (4), 279-289.
- 伊達正起・本田安都子・中村太一・ディランジョーンズ(2016).「教室英語に対する大学生の認識に関する考

察 — 小学校教員養成課程の学生に焦点をあてて」福井大学教育学部『福井大学初等教育研究』2：47-55.
山森直人（2013）.「外国語活動に求められる教師の教室英語力の枠組みと教員研修プログラムの開発 — 理論と現状をふまえて」小学校英語教育学会『小学校英語教育学会誌』13：195-210.

Walsh, S. (2002). Construction or obstruction: Teacher talk and learner involvement in the EFL classroom. *Language teaching research*, 6 (1), 3-23.

Willis, J. (1981). *Teaching English through English*. Harlow, UK:Longman.

資料1：授業展開

- | | | |
|---------|------|---|
| 目 | 標： | 日本語とその元になる英語では発音の違いがあることに気づくと共に丁寧な言い方で欲しいものを訪ねたり、答えたりする表現を知る。 |
| | | |
| 主な言語材料： | | What would you like? I'd like pizza. Here you are. Thank you. You are welcome. rice, omelet, hamburger, salad, cake, spaghetti, pizza, ice cream, juice, yogurt, sushi, French fries, parfait, natto, miso soup |
| | | |
| 2分 | あいさつ | What day is today? |
| 4分 | 導入－1 | 色々な食べ物の言い方を知る。
絵をみて食べ物を答える。
What food is this? It's pizza. |
| | | |
| 5分 | 練習－1 | 「ハンバーガーじゃなくて hamburger チャンツ」をする。 |
| | | |
| 3分 | 導入－2 | JTE がウエイター、HRT がお客さんになりレストランでの会話をデモンストレーションする。
What would you like?
I'd like pizza.
Here you are.
Thank you.
You are welcome. |
| | | |
| 8分 | 練習－2 | デモンストレーションの内容を確認した後、代表者がお客さんになる。 |
| 16分 | 活動－1 | 記憶ゲームをする。
見童が What would you like? と訪ね、JTE が I'd like pizza, hamburger, salad, cake, and spaghetti. と答え、何を注文したから班で思い出しながら、料理カードを順番に並べる。 |
| | | |
| 7分 | 活動－2 | 教科書 P37 のリスニング「だれが何を注文したかを考えよう」をしながら全体を振り返る。 |